

南北朝の政治と文化―二条良基と足利義満の和漢聯句

小川 剛生

1 二条良基晩年(康暦・嘉慶)の公武關係

室町幕府三代將軍の足利義満といえ、後世たいへん評判が悪い人物です。武家でありながら高位高官に就いて僧上をほしいままにと言われ、最近も具体的には息子の義嗣を天皇にしようとしたという学説が唱えられて、話題を集めました。そこで北朝の廷臣たちがごぞつて義満に阿諛追従してかれを権力の座に押し上げていくさまも描かれていましたが、その筆頭にいたのが摂政の二条良基で、良基にも非常に醜悪な印象を持つ人が多いと思います。

昔のことを弁護する気もありませんが、ただそれまで武家と公家との壁は非常に高かった―というより没交渉だったことは是非とも考えてください。別な世界、独立性がそれぞれ高い権門というべきでしょうか。

互いに協力して何かの重大事に当たるとはもちろんありません。一応、国王は朝廷の主、当時の言葉で言えば治天の君ということになります。それで治天の君が指示を出すことになる。たとえば延暦寺の僧兵があげられているから懲らしめろ、外国が使節を送って来たから対応をどうするか、大嘗会をするので全国から費用を徴収したい、といった国政の大事は院評定で決定されることになっています。

しかし立てられた政策を実施、当時は施行というのですが、それをする強制力がない。これは中世に公家が衰頹したという理由ばかりではなく、もともと朝廷というのは、こういう国家的な責務を果たすのが大嫌いだ。公益とか福祉といった観念が欠如している。とくに多くの官、地方官は早くに切り捨てられ形骸化していた。最小限の機能しか遣さない。朝廷というより公家政権といった方がいい訳です。京都に根付く公家それぞれ自分たちの「家」が繁栄すればいいのですから、乱暴にいえば、外交がどうなるかが地方がどうしようが知ったことではない。

このため朝廷は幕府に依存する傾向が非常に強かった。さらに内輪のことを、幕府に決めて貰う風潮さえ出て来る。そのうち、幕府もこれは勘弁してくれ、自分たちのことは自分たちで決めてくれと逃げ腰になるのです。皇位継承問題をはじめ公家社会での問題が紛糾する度に幕府に持ち込まれて、それぞれ対立する派閥が幕府に猛烈な働きかけをする。いちいち対応するのがうるさくなるのは必定です。鎌倉幕府もやはり全国政権たる自覚も力も無かった。ですのでも最後まで東国政権であるというタテマエを崩さなかったのだと思います。

逆に山城国、あるいは京都市内の徴税や警察といったことだけは、公家政権はな

かなか手放さなかった。当時はいま以上に首都に一極集中していますから、そこさえ押さえておけば何とかなった。こういう空間的な意味でも朝廷というより公家政権という方が実情にあう訳です。後醍醐天皇はそのあたりを見抜いていたのでしよう。

室町幕府は京都に置かれましたから、公家に接触する機会が増えます。もちろんさまざま干渉はするのですが、ただやはり自分たちは頼朝の後継者で関東の者だ、という自意識も依然強かったようです。尊氏も義詮も京都に住んでいても「鎌倉大納言」と呼ばれています。だいたい幕府から朝廷に何かを申し入れる時の交渉窓口、チャンネルというのは決まっています。表面は「武家執奏」という伝達役の公家(西園寺家の世襲)がいます。「執奏」というのは下の者が上に申し上げることを取り次ぐ、という意味です。治天の君は將軍の「執奏」には絶対さからえないのだけど、しかしチャンネルはここに限られている。將軍がふだん朝廷に乗り込んでくることはまずないのです。かれは官職は帯びるのだけど、あくまで公家社会の外部に立っています。この点南北朝時代の枠組みは鎌倉時代とほとんど変化していません。

そういう状況が劇的に変わるのが、二条良基の晩年の一三八〇年代、北朝年号で康暦・永徳・至徳・嘉慶といった頃です。この間に義満は「鎌倉大納言」から、公武どころか全国的な統治をする「室町殿」に変わっております。

冷泉家時雨亭文庫蔵『武家昇晋年譜』は、近年紹介された資料ですが、室町將軍の公的な履歴というべきものです。義満の伝を見ると、永和四年(一三七八)に右大将になってから、わずか四年で左大臣一上という朝廷の首班へと駆け上っています。撰関家にもないようなスピードです。

これには朝廷の方の事情もありまして、けっきょく公家政権が完全な機能不全に陥って、儀式の遂行さえ立ちゆかなくなってしまうことに原因があります。良基は治天の君に見切りをつけて、義満を教育することを考えていたらしい。但し彼が武家である以上は限界があるので、いつそ公家になって貰おうとしたのだと思います。武家に官職を与えて優遇することはこれまでもよくあったのですが、しかし武家は決して公家の真似をしない。できないのでしよう。頼朝は四日で権大納言右大将を辞め、尊氏も義詮も権大納言ですが、生涯に数回しか参内しなかった。それでも義詮は晩年良基の勧めで中殿和歌御会に出たのですが、中座してしまっただけで緊張して気詰まりだったらしい。ところが義満は良基の指導よろしきを得て、大いに公家の生活を享受し、日常的に参内し、右大将の職務をこなし、大臣に昇ると、

有識に詳しい貴族でも節会の内弁（進行役）は極めて難しいのに二十度以上も勤めた。それは『武家昇晋年譜』には義満の伝のところに「公事参勤事」という項がある位、義満はこの面で優れていたらしい。また宮中の法華懺法講で天皇と声明を唱ったり、楽会では笙を吹いたりした。これらはすべて大臣クラスの公家の作法に倣うもので、良基が教えたと言われています。

最終的には上皇に准じられる一生前から周囲がかれを上皇として待遇するようになります。そこで「皇位窺覩」「王位篡奪」を企てたという説が出て来るのですが、篡奪説の問題は、義満がいかに権力を振るおうとも、それは天皇との関係でしか担保されないことです。たとえば義満が廷臣を支配するには、当時の公家の諸家がみな、摂関家のいずれかに家礼をとっていた関係をそのまま適用し、武家昵懇衆として位置づけた。また興福寺・延暦寺といった寺社権門に対しては、上皇のやり方を真似た。義満は院宣と同じ形式の伝奏奉書を出していますが、ただこれは南都に対してのみ出されている。このことをもって義満は上皇になったという人がいますけど、もともと独立国といつてよい南都に対しては（他には藤氏長者宣しかない）、この形式を借りて命令するしか無かったということです。足利氏出身の天皇は権力の源泉にならない。太上天皇の尊号を贈ったのは後小松天皇です。自称ではない。だから義満が力を振るえば振るうほど、レジームとしての朝廷は逆に堅固となりました。かれが儀式への参加に熱心だったことも、公家の側の要望に添うものでした。このような義満の振るまいを見る時、摂政である良基が義満に与えた影響は、かなり決定的だったのではないかと思っております。ですので政治と文化との関係が類をみないほど親和的であったと思えますし、たとえば高岸輝さんの著書『室町王権と絵画』のような成果があるように、最近では室町幕府研究にも、文化的環境に光が当たってきたと思えます。

私は、二条良基晩年の十年が南北朝時代のみならず中世史の上でも極めて重要ではないかといつも思っています。史料も集めています。というよりたぶん昔の人も同じで、以後の室町將軍が常にこの康暦・永徳の例を重視したので、比較的多くの史料が遺っている。本でもずいぶん詳しく書いたのですが、いよいよやり残したことが多いと感じています。

2 公・武・禪の融和と和漢聯句の流行

良基と義満の関係は、何も政治的な事柄ばかりではなく、文化的な影響も大きかったと言われています。たとえば猿樂などの芸能を好んで世阿弥などの人材を育て

たことも大きな遺産です。そこで和漢聯句の隆盛を挙げたいと思います。

これは義堂周信の日記『空華日用工夫略集』によって述べてみたいと思います。義堂周信は夢窓疎石の弟子で、長く鎌倉五山に居た禅僧なのですが、康暦二年（一三八〇）に京都に戻されて、等持寺・建仁寺・南禅寺の住持を歴任しました。絶海中津とやらで五山文学の双璧と言われます。良基と極めて仲が良く、義満からも随分尊敬されたようです。

さきほど公家と武家とは別の世界と申しましたが、禅林はさらにまたもう一つ別の社会だといつてよいと思います。かれらは留学しますので、直接中国とつながっているのは前二者と違う。しかし禅僧の政治性と組織力の強さは驚くべきものがあります。とりわけ夢窓疎石・春屋妙葩の一派は室町幕府と結びついて勢力を伸長させます。この一三八〇年代、康暦から嘉慶というのは、義満が春屋を開山として相国寺を建て、いわゆる五山制度が定まり、禅宗が室町幕府と一体になる創期で、禅宗史の上でも極めて重要な時期なのです。

『空華日用工夫略集』を読むと、良基と義満と義堂の三者が実に頻繁に会合していることが分かります。その交際は和漢聯句が紐帯の役目を果たしていました。この間の推移を簡単にまとめますと、連歌数寄の良基は和漢聯句にも熱心であったのですが、上洛した義堂と文学上の意見が投合して開眼することがあったらしく、いっそう熱を入れた。二条殿や義堂の等持寺で頻繁に和漢聯句を催した。そして義満も、良基や義堂の勧めで、永徳二年（一三八二）から加わるようになった。翌年にはもう室町第でも聯句の会を開いている。

その永徳三年は、良基が摂政、義満が左大臣、義堂は南禅寺住持だったので、毎日のようにどこかで会っては和漢聯句を催していた。そのことは拙著『二条良基研究』でも記しました。たまたまこの年は記録が多く遺っているせいもありますが、春屋・太清・絶海といった官寺の住持、あるいは近衛道嗣や万里小路嗣房といった北朝の重臣も巻き込んで、ほとんど明け暮れ狂っていたといつてもよい。景品も多く出た遊興でもあって、高官高僧のサロン文芸とけなされますが、しかし和漢聯句がかれらにとつて極めて面白いものであったことは間違いない。しかも、和漢聯句に参加する人々が、この時代の公武禪の権力のヘゲモニー（主導権）を握ることは否定しようがない。和漢聯句にこそ、この時代の学芸と権力構造とを一緒に解くカギがあるのではないかと考えてくるのです。

3 『至徳三年秋和漢聯句百韻』をめぐる

和漢聯句とは、五七五ないし七七の和句と五言句の漢句を連ねていくもので、連歌と同様に百韻を単位とします。木に竹を継ぐようなものですから、たいへん奇妙な形式の文学といえます。その歴史を少しお話しします。

連歌から必ずしもそのまま派生してきた訳ではありません。中国には聯句という文学遊戯が古くからあって、韓愈や白居易が楽しんでいました。ただ二人での唱和の域を越えませんが、百韻続けるといった決まりもありません。

日本では作文会のために聯句をさせることもよくあったようです。おそらく、長連歌が急速に発達していったことを受けて、弘安年間（一二七七〜八八）、後宇多院の朝廷で、三人以上の作者が和句と漢句をこちやませにして付ける形が始まったと言われていますが、もとよりはつきりしたことは分かりません。作品は全く違っていません。良基の『菟玖波集』には、巻十九に「聯句連歌」という項目が立っていて、漢句に和句をつけた付合二十四が載っています。余り多くはなく、そこに取られた作者を見ても、和漢聯句が始まったのは決して古くはなさそうで、鎌倉後期からというのは当たっていると言われています。

一方、禅林では聯句が非常に盛んであった。こちらは中国の聯句と同じものです。禅僧が修行の息抜きにするものであった。連歌は季節や素材の発想の移り変わりを楽しむのですが、聯句はテーマを一定とするものでもどんなに複数の人が入っても一人が作ったように見えるのをよしとした。そのような意味でも公家の連歌・聯句と、禅林の聯句とは、なかなか相容れないものであった。

こういう状況からは、良基晩年の公家武家禅林を巻き込んだ和漢聯句の流行はやや奇異でさえあります。しかし和漢聯句の実態は明らかにならなかった。貞和二年（一三四六）の『西芳精舎和漢聯句』を除いて、南北朝期は作品が遺っていないと言われていました。義満と良基の時代の作品も、『空華日用工夫略集』に一、二句程度引用されるものだけでした。だから実際にはどんな句を作ったのかは分からない。

ところが、良基・義満および義堂・絶海らの和漢聯句百韻を収める写本が、京都大学附属図書館谷村文庫にあることが分かりました（『和漢聯句集』四―24―ワ貴）。私の本で紹介だけはしました。写本を見てまいりましたが、江戸初期の写で、和漢八・漢和六合計一四の百韻を収めています。問題の百韻は三番目、一〇丁裏から一五丁表に書写されています。ほとんどが天文から慶長元和にかけてのもので、この百韻だけ突出して古い訳ですが、和漢聯句が最も盛んであった時、古い時代の実例として参照されたのだと思います。その後、京都大学文学部で和漢聯句についての

共同研究が始まり、本文異同を付されたテキストが成果報告書『享祿以前 和漢・漢和聯句集』として刊行されています。作者を記していないところがあるが、京都女子大学にもう一本あり校合すれば補訂できます。最初の五句を出しておきましょう。発句は良基です。

和漢

- 1 露フケハ玉ニ声アリ松ノ風 二条 絶海
- 2 山静葉鳴秋
- 3 西閣宜新月 義堂
- 4 南榮(呂)俯碧流 獨芳
- 5 白雲簷下宿 无求

端作には「和漢」とあるだけで、開催事情を示す記述は何もなく、古記録にも徴すべきものはありません（後で推測を述べます）。参加者の顔ぶれは至徳年間の空華日用工夫略集の和漢聯句記事に出てくる面々とよく一致します。禅僧は五山住持を中心とした人々で、とくに夢窓疎石の弟子が多い。その他の派の人も義満や義堂と親しい人ばかりです。

公家では良基と家礼の人々、義満とその側近であった日野資康・資教兄弟、万里小路嗣房といった人々がいますが、しかしその主力は良基と、かれが眼をかけていた地下連歌師であったと見てよいでしょう。『落書露頭』によると、良基は晩年に「当時花下の衆とあそばしたるは、波多野・朝山・成阿・道助等なり」と述べていますが、そのうち平井道助以外の三人が参加しているのが注目されます。作者不明の句がなお四句あり、また出自不明の人もいますが、全体の傾向は変わらないでしょう。公家衆の官職表記に着目すれば、それは至徳三年（一三八六）の秋に収まります。発句を良基、入韻句を絶海が出していますのは、「客発句に亭主脇」という慣行があてはまるとすれば、おそらく八月、絶海中津の住する等持寺での開催だと思われまます。完存するものとしては、史上二番目に古い和漢聯句ということになります。以下では仮に『至徳三年秋和漢聯句』と呼びたいと存じます。

開催の事情について改めて推測しておきますと、禅林では住持に就職するなどの機会に記念して、同門の兄弟が集って聯句が持たれることがあります。賞品も用意され、団欒に近いといつてよいかも知れない。絶海中津がホストだと思うのですが、実はこの絶海はなかなか気性の激しい人で、義満に直言し、勘気を受けて至徳元年から四国に蟄居していました。至徳三年二月に許されて上京、等持院に住しています。等持寺に入った後も、義満はなお絶海に立腹することがあったことが『空華日用工夫略集』の至徳三年十月二十六日条に見えます。ここに出て来る「播柱侍者」、

侍者は長老の左右に侍ってその給仕をする者のことですが、当時の夢窓派の寵児であつたらしい。この二人が義満の機嫌を損ねたのを絶海が弁護したので絶海も怒りに触れたという記事です。そして、これは『至徳三年秋和漢聯句』に出てくる「播侍者」と「桂侍者」のことでしょう。兄弟子の義堂周信らは、絶海と義満の関係修復に、ずいぶん気を遣つたようです。

なお絶海の詩集『蕉壁藁』には「新居植松」という題の七言絶句があります。「締樺功成壯麗宜。栽松為護万年枝。節高肯望秦封爵。大樹蔭涼有所期」。これは新たに住院を建てた時の作で松を植えたとあります。『至徳三年秋和漢聯句』でも発句は「露ふけば玉に声あり松の風」でした。連歌と異なり、禅林の聯句では時事的な話題を賦すことも可なのですが、また3・4あたりの対句は典型的な宿替めの句です。絶海が新たな塔頭を建ててそこに入った時の會と見れば、よく分かると思います。4に「南呂」の語があるのは八月だったからと見てよいと思います。

良基は六十七歳、義満は二十九歳、良基の最晩年の作品として連歌史の上でも重要です。また義満の和漢聯句というのにも他に例がないだけにたいへん貴重です。

4 漢句と和句との距離

和漢聯句の式目には、一条兼良や後土御門天皇の作ほかいくつかあり、明応七年の『漢和法式』で集大成されますが、これはそれより百年も前となります。こうした式目との照らし合わせ、構成の分析は後日に譲るとして、まず気づくのは漢句が五十九、和句が四十一という不均衡です。四十年前の『西芳精舎和漢聯句』は漢六十二、和三十八でした。式目では五〇・五〇が理想なので、ほど遠い。漢句、禅林のペースとなつてしまつていゝのはやむを得ないのでしよう。去嫌について十分に調べていませんが、一座四句物とされる花は二しかありません。一方、月は九つもあります。

一方、和漢聯句では偶数句の漢句に押韻しますが、これは厳守されています。韻字は下平第十八の尤韻です。西芳精舎和漢聯句は押韻が崩壊していたのでこれは進歩でしょう。偶数句で三つほど下平第十九の侯韻を使った句がありますが、現在の韻では別であるものの、この頃の韻書、たとえば元の熊忠が編んだ『古今韻会舉要』などを見れば、通用していたと見てよさそうです。

それでは、具体的な付け方を例示したいと思います。せっかくですので、義満の句の辺りを中心に例示したいと思います。6〜10です。ここで表記を改めて掲げます。

6 緑竹檻前抽 天錫贊囀

7 今ことにかしこき人は世に出でて 足利義満

8 聖功皆可謳 義堂周信

9 商霖民慰望 太清宗渭

10 舟のやすきもたゞかちのまゝ 二条良基

6は僧坊の情景と見てよいのですが、『三体詩』第二、李山甫「方干隠居」詩の「溪畔印沙多鶴跡。檻前題竹有僧名」に基づいています。方干という隠棲した僧のもとを尋ねる様子です。『三体詩』はもう当たり前のように典拠となつています。これを7の義満が受けて和にとりなしています。隠者ということ、竹林の七賢のことを念頭においたのでしょうか。「竹トアラバ、代（夜共）」（『連珠合璧集』）というのによくある寄合です。「隠者も聖代なので世に出てきた」というのは商山四皓の逸話もありますが、暗に絶海のことを寓しているでしょう。義満の立場からすると、相応しい句とは言えるでしょう。次の8義堂の句、「聖功」は帝王のいさおしということ。ここは義満の治世を祝言する意図を見てよいと思います。禅僧の大檀那に対する追従のしかたがよく分かります。

9太清の句、「商霖」は旱魃の時の大雨です。やはり民が喜んでいゝものですが、『尚書』の、殷（商）の高宗が宰相の傳説を召した時の、「爰立作相。王置諸其左右。命之曰、朝夕納誨。以輔台徳。若金、用汝作礪。若濟巨川。用汝作舟楫。若歳大旱、用汝作霖雨。（爰に立てて相となす。王諸を其の左右に置く。命じて曰く、朝夕に誨を納れ、もつてわが徳を輔けよ。若し金ならば、汝をもつて礪（といし）となさん。若し巨川をわたらば、汝をもつて舟楫となさん。若し歳大いに早すれば、汝をもつて霖雨となさん）」と述べた内容に由来するもの。

雨が降るように、あるいは降り過ぎないように祈るということは、たとえば「時によりすぐれば民のなげきなり」という有名な源実朝の和歌があるように、政治家の重要な仕事とみなされていますので前の句とよく付く。そうすると7・8・9とあまり句境が変化しない。

10で良基が和句に転じます。いきなり船旅の句ですが、舟と楫は『尚書』の「若し巨川をわたらば、汝をもつて舟楫となさん」によるものです。前句との関係では高宗と傳説との関係を響かせているのですが、これを視野に入れなくとも船路が安全なもの楫のまにまにと読めます。句の内容が独立していて、ここからようやく流れていく。

この和漢聯句で、和を漢で受ける、あるいは漢から和に転ずる句の作者を見ると、前者は当然ながら禅僧が均等に当たっていますが、後者が十九例あるうちで、実に

十四句が良基の句なのです（義満・通郷・季尹・成阿・師綱が各一）。つまり漢句が続いてきたのを和句がとりなすことが、いかに難しかったということなのだと思えます。これをこの他にも具体的にみてみますと、

22 寒雨響文楸

東坊城秀長

23 をのゝえのくちきとすれば冬がれて 二条良基

前句は晩唐の杜牧の「国棋王逢を送る」詩「玉子紋楸一路鏡。最宜簷雨竹蕭蕭」に近いようです。「紋楸」とは碁盤のことですが、ここは和歌の素材となる「ひさぎ」（アカメカシハ・冬の景物）も含まれているかも知れません。碁からは王質爛柯の故事で斧が腐ったというのと「朽ち木」が出される。ここはありふれているようですが、やはり和歌的な情緒に転換させているのが非凡なのかも知れません。

34 失時腐化鳩

太清宗渭

35 かくれなき罪のはかりもしらぬ身に 二条良基

前句は『礼記』月令の「始雨水、桃始華、倉庚鳴、腐化為鳩」という、七十二候をそのまま使っているだけですが、付句はまた随分と雰囲気が違う。これは調べると伝典で、釈尊の前身で、鷹に追われた鳩を救うために自分の肉を秤にかけたという戸毘王の捨身物語を使っています。鷹・鳩から秤の寄合でずいぶん雰囲気が変わりますが、釈教の句を出したかったのでしょう。

51 旅寓春云老

玉岡如金

52 うらやましきは帰るかりがね 二条良基

前句は単なる旅先での述懐ですが、良基は『源氏物語』須磨の巻の「ふるさとをいづれの春かゆきて見んうらやましきは帰るかりがね」という和歌によつて、光源氏の境遇にとりなす。ちよつと無造作な付け方ですが、誰にも分かるように源氏を一回は使ってみたかったのでしょう。

このように漢和の連結と発想の転換の自在さは良基の独壇場であつて、他の和句の作者は漢句の作者と対等には亘りあえない。義満も和句を二つですから努力賞というところでしょう。この和漢聯句がまがりなりにも成立し得たのは殆ど良基のおかげといつてよいでしょう。

良基は延文三年（一三五八）にしろした連歌論書『擊蒙抄』で、和漢聯句は「心を付けて詞をまはせと教えている。

一、和漢連歌の躰、尋常の連歌には聊かはるべし。当世、朗詠・楽府などを記付事常にみゆ、連歌の時は、いさゝか句に力あるやうにて、余情のあるべき也、所詮太白・子美・東坡・山谷などが風流（情）を和にとりなすより故実あるべからず。但し漢句の風情を和にとりなす事、殊に作者の骨法あるべし、心を取

て、詞をうつすべからず。詞あひかなひたるもあるべし、骨なき（詞こはき）人のとりたるは、やがて詩の如くなるなり。ことに用心すべし。（晩唐の詩の体も連句によし）

要するに、漢と和では、寄合がそんなにないから、漢句の風情を和句の言葉で生かせ、という訳です。下手な者は「詩の如くなる」というのは痛烈です。これは三十九歳の時の教えですが、ここでの提言通りのことを実現できていると思います。良基がいなくなった後、しばらく室町殿や内裏仙洞での和漢聯句は、ほとんど見られなくなることもよく分かります。少なくとも公・武・禪の交じった会は、はるか寛正・応仁・文明くらいまで下がらないと復活しません。公家の家では散発的に行われていたようです。禅僧たちは倭句を詠むことは決してありませんから、かれらは和漢を棄てて、禅林での聯句の世界に再び閉じこもってしまったのだと思います。やはり永徳・至徳の頃は、非常に異常な訳でして、それだけ良基の存在は大きかったと言えらると思います。

5 宋元韻書の影響に及ぶ

和漢聯句は、よく娛樂であると言われますが、これだけ高踏的・晦渋なものを果たして当座の座興で楽しんでいたのか、俄かに信じられない感じもいたします。とくに和句一、二句だけの作者はどうしていたのか。参加することに意義があるといつてしまえばミもフタもないですが、ただしそのような人を置き去りにして良基たちが楽しんでいた訳ではない。義満ももちろん、参加者全員が、出される句に対し、理解し得る知識の地盤を共有していたからこそ、創作と享受の楽しみを満喫できたはずで

そういうことを可能にしたのが、刊行された韻書です。さきに『古今韻会舉要』の名を挙げましたが、有力な候補となるのが、元の陰時夫の編んだ『韻府群玉』です。平水韻の韻目に沿つて韻字が排列してありますから、押韻する文字を探すのに便利ですが、さらにそこに用例もあわせて掲載してあれば、作詩の手引きとなり、一種の類書といつてよい。元統二年（一三三四）初刊、至元二八年（一三六八）以後、何度も増補改編を重ねて刊行され、日本でも五山版が南北朝期に出ている。住吉朋彦氏による浩瀚精確な伝本研究が出ており、最近完結しました。

この至徳三年の和漢聯句でも、たとえば左のような例は、原典よりも『韻府群玉』のような書物を介在させた方がよりわかりやすい。

56 題詩付御溝

播侍者

57 たまづさと柿の一葉のながれきて 二条良基

これは「題葉譚」とでも言うべき、男が思いを葉に書いて宮中の河に流すと女が拾うという筋の物語で、いろいろな書物に見えます。和漢にバリエーションが多く、良基も『年中行事歌合』で「ながれての名にやたちなん紅の一葉をうけし水茎のあと」という詠を出していますが、いまこの句の韻字の「溝」、「韻府群玉」を見ると「御溝」があり、于祐という人を主人公としている。指示に従って「葉」のところを開くと、于祐と韓夫人の話の引用があります。これでよく分かると思います。

もう一つ、

76 空帳北山丘

椿庭海寿

77 月に鳴く夜寒の猿声すみて 二条良基

『韻府群玉』には「曉猿」の語が立てられ、「山人去兮曉猿驚」という「北山移文」の文が示されています。「北山移文」とは『文選』巻四十三に収められる劉宋の孔稚珪（四四八〜五〇二）の作で、鐘山に隠遁した周顒（しゅうぎょう）という人物が齊の朝廷に仕官したのを非難し、再び山に立ち入らせまいとした回し文です。ここは周顒が立ち去った後の山中の様子を描いた「惠帳はむなしくして夜鶴は怨み、山人は去つて曉猿は驚く」という一節です。同じく南宋の類書である『事文類聚』前集之三十三・隠逸のところにも全文が載っています。

題葉譚と北山移文、ともに室町の禅林ではきわめてポピュラーな文学の素材でした。それが、かなり早い時期から、和漢聯句にも取り上げられてことが分かります。普及した原因としてこういう類書・韻書を前提にする必要がある。『韻府群玉』は原型でも二十巻ある膨大なものだから、和漢聯句の場に持ち込むにはそれなりのダイジェストが必要でしょうし、また他にも候補はあるでしょうが、良基たちは明らかに『韻府群玉』を参考にしていたようです。そのことがこの少し前の『空華日用工夫略集』に出て来ます。永徳元年（一二三八）十一月二日条で、書き下して引用します。

太清と同（とも）に二条准后の招に赴く。永相山等三五人、官人万里小路等数人、（中略）和漢聯句に、始めて今の大明撰の洪武正韻群玉を用ひ韻をなし、第一東字に遣ふ。凡そ吾国俗の旧例として、和漢聯句に漢に韻あり和に韻なし、今則ち新たに立て、和も亦押韻す、准后起句を余・太清兩人に譲る、兩人相ひ推し、迫られ已を得ず発句を題して曰く「半・愛日を分く」准后次いで曰く、「木の葉も庭のつもる紅」、太清曰く「水紋池の錦濯ふ」、

これは大変注目される記事で、まず指摘されるのは、和漢聯句は発句は必ず五七五の和句であります、この時は漢句を発句として（聯句は第唱句）、和句を入韻

したのですが、和句でも押韻したということです。最後に来る文字を体言止めにする。つまり偶数句に来た和句も押韻することになります。「紅」です。これは連句史上の新機軸であって、とくに区別して漢和聯句と呼ばれます。具体的な韻書の利用の様子が分かります。

もう一つは、その押韻のために、最近、明で撰ばれた『洪武正韻群玉』を使用したということです。

これは明の太祖の『洪武正韻』とも言われています。明の太祖は洪武八年（一三七五）に、学者に命じて一〇六あった平水韻を七六に整理し、この韻を制定した。しかし、明末まで刊行された形跡がない。どうも書物の『洪武正韻』ではないようです。

一方、『臥雲日件録抜尤』では、この『空華日用工夫略集』の記事を引いて、「洪武韻府」と言っている。実はこの洪武韻の制定を受けてでしょう、改編された『韻府群玉』が同じ年に出版されています。この版が零本数本ですが日本に遺っていることが住吉氏によって紹介されています。この本には当時たいへん人気であった学者宋濂（一三〇一〜一三六一）の跋文が付いています。これによると、明朝では韻を實際にあわせて正したので、この書を重刊するとあります。良基が見た『洪武正韻群玉』とは、この版を指すのではないかと思えます。そうすると僅か六年を経ての受容となります。

深沢眞二氏は、後陽成天皇の時代の和漢聯句会の隆盛に触れて、和漢聯句が盛んになる時期は外交が活発であると指摘しています。その伝でいうと、南北朝末期もまた義満のもとで積極的な外交が展開されようとする訳ですから、慶長にはるか先だつての繁栄と言つてよいかも知れません。

もちろん日本人は呉音漢音で聞いていた訳ですし、また発音体系は驚異的に単純ですから、四声の別もかなり怪しいでしょうし、まして当時の中国の漢字音の変化に敏感であったとは思えません。たとえば義堂周信が宋の五山第一である「徑山（きんざん）」のことを話したら、義満は「金山」と勘違いしたという話があります。韻の整備・統合といつても、日本人にとっては、結局どの文字がどの韻に属しているか、という点に関心が収斂するのではないかと思えます。しかし、これが和漢聯句に大きな問題となることは想像に難くないのです。

そもそも宋から元は音韻変化が甚だしい時代で、最もスタンダードな『広韻』はいわゆる中古音を規準としている訳ですが、既に時代遅れであった。その後『礼部韻』が出て増補されたり、また元には『中原音韻』といった、完全に世俗の発音にあわせた韻書が出たり、そして洪武帝のように現行の音に改めようとする動きがあ

った。元末には『経史正音切韻指南』という本が出たこともあり、学問にも適用しようとする方向があったことが分かります。

しかも洪武帝という皇帝は、国内のみならず、東アジア諸国に自分の制定した韻を配って、使用を強制しようとしたらしいのです。わが二条良基も微弱ながらその影響を受けたことになりす。ただ、このような事例から、良基も海外に目が向いていたということには安易に持つていかない方がよいと思います。注意すべきは彼士の事情が日本の学問にも大いに刺激を与えずにはいられなかったことだと思えます。公家の学問は依然紀伝道が中心で、しかも写本の訓点を父祖から教わり墨守するだけですから、良基はその意味では具眼の士でしょう。しかし、それは同時にこうした韻書が、最も早く参照とすべき書物であったということも示しているのです。最近、日本文学においても「東アジア文化圏」のうちに置いてとらえようとするのが大流行ですが、やはり日本は辺境に特殊であつて、受容の先後よりも消化した後の方が大事との思いが強いのですが、それは書物の上での影響がどう働いたかということなのです。

たとえば南宋に刊行された『韻鏡』が、学問上の非常な権威を持つて来るのがこの時代なのです。五十音図と同じ原理で、声母と韻母との組み合わせで、漢字音を示す仕組みです。音韻を二文字で示す「反切」ですね。たしかに、これで一応現地での発音は知ることが出来ます。しかし、入明した禅僧ならともかく、大半の日本人が、このような韻図を知ったところで、実際に使いこなせる筈はありません。あくまでブッキッシュな関心であつたのではないか。『韻鏡』は実によく使われ、尊重されていて、室町時代後期には日本人の手で出版までされていますが、実は將軍の名前や年号を決める時、候補となつた二文字について、必ず反切が求められ、それは以前もあつたのですが、その時には、この『韻鏡』がリファレンスとされているのです。

これは『韻鏡』という書物そのものに対する、「盲目の尊敬」があつたと思ひえない。こういう現象が、さきの『韻府群玉』を使った漢和聯句の始まりということにも応用できそうです。

和漢聯句については、京都大学で盛んに研究を進めています。すでに室町期の百韻の注釈が二つ出ています。私は今までの良基研究の延長として、一人で読んでいますので、遅遅とした歩みです。韻書の重要性など、作業しては実感しましたが、たぶん識者はもう先刻ご承知のことと思ひ、講釈恥ずかしい限りです。ただ改めてこの和漢聯句、内容をざっと読んだ上でも、いろいろな学問史の材料が拾えます。それらは、深層の動きと連なっているのではないか、と思えてきます。

どうして、そんなに長く二条良基の研究をしているかについては、もう生存の条件と同じと答えるほかございませんが、良基一人、南北朝時代でさえ、まだようやく手をつけたばかりのことです。ここからさらにまたずつと続くはずなのですが、いまは体力と時間がありません。体力をつけて取り組みたいと思ひます。これまで自由に学問をさせていただいたことに感謝いたします。これで報告のとりまとめさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

〔参考文献〕

- 朝倉尚『抄物の世界と禅林の文学』(清文堂出版 平8)
家永遵嗣『室町幕府將軍権力の研究』(東京大学日本史学研究所叢書1 平7)
伊藤旭彦『足利義満の公家化』(書陵部紀要21 昭45・3)
伊藤敬『新北朝の人と文学』(三弥井書店 昭54)
今谷明『室町の王権—足利義満の王権奪計画』(中公新書 中央公論社 平2)
臼井信義『足利義満』(人物叢書 吉川弘文館 昭35)
小川剛生『二条良基研究』(笠間書院 平17)
藤木英雄『中世禅林詩史』(笠間書院 平6)
金子金治郎『菟玖波集の研究』(風間書房 昭40)
木藤才蔵『連歌史論考』(増補改訂版 明治書院 平5)
木藤才蔵『二条良基の研究』(桜楓社 昭62)
木村晟『漢和聯句』の韻書(二)(駒沢国文37 平14・2)
京都大学国文学研究室中国文学研究室編『享祿以前和漢・漢和聯句集』(京都大学大学院文学研究科 平19)
坂本麻実子『足利義満と笙』(小島美子・藤井知昭編『日本の音の文化』第一書房 平6)
桜井英治『室町人の精神』(講談社 日本歴史12 平13)
鈴木元『題葉譚—逍遙』(京都語文2 平9・10)
鈴木元『紅葉のふみ—年中行事歌合の一首から』(和歌文学研究75 平9・12)
住吉明彦『韻府群玉』版本考(一)〜(五)。(斯道文庫論集35〜39 平13・2) 17・2)
高岸輝『室町王権と絵画—初期土佐派研究』(京都大学学術出版会 平16)
新田一郎『太平記の時代』(講談社 日本歴史11 平13)
能勢朝次『聯句と連歌』(要書房 昭25) ↓『能勢朝次著作集7連歌研究』思文閣出版 昭57)

- 花登正宏『古今韻会拳要研究―中國近世音韻史の一側面』(汲古書院 平9)
- 深沢真二「聯句と和漢聯句」(国語国文57―9 昭63・9)
- 深沢真二「連歌・俳諧の研究―桃山時代の和漢聯句」(私学研修 165・166 平17・12)
- 宮紀子『モンゴル時代の出版文化』(名古屋大学出版会 平18)
- 桃崎有一郎「足利義満の公家社会支配と「公方様」の誕生」(zeami.04 平19・6)
- 森茂暁『南北朝期公武関係史の研究』(文献出版 昭59)
- 安田章『中世辞書論考』「和漢聯句と韻書」(清文堂出版 昭58)
- 柳田征司『室町時代語資料としての抄物の研究』(武蔵野書院 平10)